

『平家物語』禿髮考

— 諸本の指向性をめぐって —

吳起燾*

目次

- 1.はじめに
 - 2.「禿髮」関連記事の諸本の共通する部分
 - 3.読み本系のみ「禿髮」関連記事
 - 4.おわりに
-
-

1. はじめに

『平家物語』における清盛が王法・仏法に反する人物として描かれていることは主知の通りである。つまり、王法と仏法に支えられている王朝的秩序に反する反逆者としての清盛造型が『平家物語』諸本に行われているわけである。しかし、こうした反逆者といっても諸本すべてが同じ趣旨の清盛造型を行っているわけではない。すなわち諸本間には趣を異にするような清盛の造型がなされ、それをおおまかで分けて考えたとき、語り系と読み本系間の違いとして見えてくる。こうした清盛の造型と関連した諸本の筆致の違いについて、今までの先學は、非難性を持ちながらも清盛の英雄的な人間的な面にも目をまわした語り系と比較して、読み本系にはもっぱら清盛を専横を振り回す王朝秩序の破壊者として位置付けられていると把握してしるようである。しかし、兩系統の諸本における清盛関連記事を綿密に調べてみると、清盛に対する非難の程度の差を越える、認識の差または造型の方向性の差が兩系統の間に認められる。そして、その好個の例として「禿髮」（または本によっては「禿童」とも記されている）を挙げることができる。

この章段は、直接的な清盛の生き生きとした言動が現されているわけではないが、兩系統それぞれが清盛をどのような物語の意味をもって描き、位置づけようとするのかといった問題を考えるとき、兩系統それぞれが志向する清盛造型の方向性を窺わせてくれる。こ

* 삼척대학교 강사 일본중세문학

うした兩系統における清盛造型の違っている傾向を追究していくにあたって、語り系の覺一本と読み本系の延慶本との本文内容の比較を中心としながら、兩系統の他の諸本の比較に臨んでいきたい。

2. 「禿髮」関連記事の諸本の共通する部分

語り本系と読み本系とに共通して存在する章段の中で、清盛の位相を考えるのに欠かせないのが「禿髮」である。この章段には、直接的な清盛の言動は表されていないものの、兩系統の諸本それぞれが清盛を如何に位置付けたかについての方向性を窺わせてくれる。まず、諸本の校異に目を向ける前に、覺一本の卷一「禿髮」において清盛が如何に語られたか、見てみよう。

清盛は仁安三年、病にかかり、存命の爲、五十一歳で出家し、法名を淨海と称する。その後一門はますます榮え、平時忠のごときは「御一門にあらざらむ人は人非人なるべし」と豪語するほどであって、この榮華に迎合しない人はいなかった、というのが覺一本をはじめ、各諸本に載せられている平家榮達の極みを伝える逸話である。ただ、この記事の後に、源平盛衰記には、

昔吳王を好みしかば、百姓癩瘡多し、楚王細腰を好みしかば、宮中に餓死おおし、城中廣眉を好めば、四方半額且し、城中大袖を好めば、四方正帛を用ゐると云ふ事あり。

(卷第一「清盛怪鳥を捕る竝一族官位昇進の事附禿童竝王莽の事」)

のように漢詩が和文体として記されている。これは「衣文のかきやう、烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波羅様といひて(ン)げれば、一天四海の人皆是をまなぶ」(覺一本・卷第一「禿髮」)人々の行動への直接的な叱責として表現されているものだろうが、結局、平家の榮華のありさまを否定し非難しようとする意図で挿入されたとも思われる。また源平盛衰記には、これに續いて、

いかなる賢王賢主の御政も、攝政關白の御成敗も、世にあまされたるいたづら者な(ン)どの、人のきかぬ所にて、なにとなうそしり傾け申事はつねの習なれども、此禪門世ざかりのほどは、聊いるかせにも、申者なし。其故は、入道相國のはかりことに、十四五六の童部を三百人揃て、髮を禿にきりまはし、あかき直垂をきせて、めしつかはれけるが、京中にみちくて往反しけり。をのづから平家の事あしざまに申者あれば、一人きゝ出さぬほどこそありけれ、余党に触廻して其家に亂入し、資財雜具を追捕し、其奴を搦と(ッ)て、

六波羅へるてまいる。されば目にみ、心にしるといへども、詞にあらはれて申者なし。六波羅殿の禿といひて(ン)しかば、道をすぐる馬・車もよぎてぞとほりける。禁門を出入すといへども姓名を尋らるゝに及ばず、京師の長吏是が爲に目を側とみえたり。

(覺一本・巻第一「禿髮」)

とある。この覺一本の内容は同系の諸本のみならず、延慶本などの讀み本系の諸本にもほぼ同主旨の内容を示しているが、延慶本によって確認すると次のようである。

イカナル賢王賢主の御政モ、攝政關白ノ御成敗モ、人ノキカヌ所ニテハ、ナニトナク、代ニアマサレタルイタツラ者ノカタブケ申事ハ常習也。而ニ此入道ノ世ザカリノ間ハ、人ノ不聞所ナレドモ、聊モイルカセニ申者ナシ。其故ハ、入道ノ謀ニテ、我一門ノ上ヘヲ誇リ云フ者ノヲ聞ントテ、十四五、若ハ十七八バカリナル童部ノ、髮ヲ頸マハリニ切マハシテ、直垂小袴キセテ、二三百人召使ケレバ、京中ニ充滿シテ、自ラ六波羅殿ノ上ヲアシザマニモ申者アレバ、是等ガ聞出シテ、吹毛ノ咎ヲ求テ行向テ、即時ニ滅ス。オソロシナド申モ愚カ也。サレバ眼ニ見、心ニ知ルト云ヘドモ、詞ニ顯レテモノイフ者ノナシ。上下恐ヲノキテ、道ヲ過ル馬、車モヨキテゾ通りケル。「雖出入禁門、不問姓名。京師ノ長吏、爲之側目」トゾ見タリケル。直事ニハ非トゾミエシ。(第一本「清盛繁昌之事」)

覺一本の記述と違うのは、「童部」の數と歳が固定されていない点程度であって、ほぼ同じ内容を伝えていることが確認される。この本文の要旨を整理してみると、次のようになる。

- ①いつの世にも悪口を言う者はいるのに、清盛(平家)の繁盛時は跡を斷った。それは、清盛が、禿髮と称する少年たちを京中に放って密偵としたからである。
- ②禿髮は十四五六歳(あるいは十七八)、三百人(あるいは二百人)で、「あかき直垂」の姿をしている。
- ③禿髮の亂暴さに人々は恐れ、目に見えても心にあっても言葉には出せなかった。
- ④禿髮は禁門を出入する際も、姓名を聞かれることなく、「京師の長吏」は見ても見ぬふりをした。

つまり、この章段は清盛の壓政・暴政の一面を象徴的に描いたものであって、清盛の生き生きした言動を表してはなが、禿髮の亂暴さ、威勢堂々さはそのままほかならぬ清盛のありさまとして捉え返されるのである。したがって、この章段において、禿髮・禿童が如何なる物語的意味をもつかを究明することによって、諸本おのおのにおける清盛像への指向性が把握できるのではなからうか。

覺一本と延慶本とのここまでの内容を見る限りでは、獨裁者、暴政の爲政者としての

姿、「おごれる人」、「猛き者」としての清盛の姿は窺われるものの、「祇園精舎」に示されている、異朝の王位篡奪者または逆臣であった漢の王莽、唐の祿山、または本朝の自ら平親王と名乗った將門と將門と共に反逆を起こした純友のような、王権・王位の篡奪をたくらむ反逆者の系譜に連なる人物像として考えさせるまでは描かれていないように思われる。

また、これら諸本の引用文の最後に「禁門を出入すといへども姓名を尋らるゝに及ばず、京師の長吏是が爲に目を側とみえたり」とあるのは、禿髮・童部の權勢の程度を表した象徴的な意味をもつものであろうが、『日本古典文學大系』の注釋によれば、「長恨歌伝に楊貴妃一族の横暴を語って「禁門を出入すれども問われず、京師の長吏之が爲に目を側む」とあるのによつた」とある。こうした『平家物語』における『長恨歌伝』文の借用についての柳瀬喜代志氏¹⁾の論がある。

この平家「禿髮」の象形は、既に『平家物語』緒注が指摘してきたように、『長恨歌伝』の、楊貴妃の姉妹や楊氏一門の外戚としての權勢を描いた「出入禁門不問、京師長吏爲之側目」の句を訓讀し、その措辭を踏襲して行ったものである。楊氏一門は、玄宗の寵愛を頼み人も無げな振る舞いを重ねた故に内外の人に恨まれて、ついには安祿山の亂を招いた責めを負って死を賜わった。この「禿髮」の章は、典語を用いて清盛の強權と壓制とを「禿髮」の「三百人」に表象している。当時の『長恨歌』や『長恨歌伝』の讀みは、楊貴妃を寵愛して外戚に政柄を委ねて大亂を招いた玄宗の失政を批難し、興亡成敗の條理を明らかにした鑑戒としていたから、清盛「禿髮」の横暴を『長恨歌伝』の句を借りて寫した深意は「奢る平家久からざる」没落の兆候を書き込むことにあったと見なければならない。

柳瀬氏の説明でも指摘されているように、「奢り」「高ぶつた」末減んでしまう平家一門と云つた物語の構想の上で設定された記事であることは疑いのないことであろうが、一つ注目しておきたいのは、禿髮に象徴される清盛の權勢が『長恨歌伝』の楊氏一族の權勢に喩えられた点である。つまり、楊氏一族は王權に逆らつたり王位を望んだりしたのではなく、玄宗の寵愛を頼って奢り高ぶつたのであり、そうしたありさまが清盛の振る舞いに喩えられていたということである。すなわち、「祇園精舎」の記述を借りれば、清盛は「おごれる」「たけき」者であり、「民間の愁る所」を顧みない人物として、威勢堂々な權勢家としての造型がなされているのが、兩系統の共通する部分である。

1) 柳瀬喜代志「禿異聞考」(『日本文學』第四六卷 第五号 1997・5) p.159

3. 読み本系のみの「禿髮」関連記事

しかし、延慶本をはじめとする読み本系のほうはここで止まらず、禿髮の由来と関連する續きの話がある。まず、それを延慶本によって確認してみると、「或人」の「抑此禿童コソ心得ネ。縦ヒ京中ノ耳聞ノ爲ニ召仕ハルト云ドモ、只普通ノ童ニテモアレカシ。何ゾ必シモカブヲソロフル」という疑問に對して、「或儒者」の説明の形態で示されている。

或儒者ノ云、「伝聞、異國ニカハルタメシ有ケリ。漢帝ノ御世ニ王莽大臣ト云、賢才殊勝ノ臣下有ケリ。國ノ位ヲ貪ラムガ爲ニ、謀ヲ廻ラス様ハ、海辺ニ出デ、龜ヲ幾千万ト云數ヲ不知取集テ、其龜ノ甲ノ上ニ、「勝」ト云字ヲ書テ、浦々ニ放ヌ。又銅ノ馬ト人トヲ造テ、竹ノヨヲ通シテ是ヲ容ル。近國ノ竹ノ林ニ、多ク此ヲ被籠ケリ。然後、懷妊七月ノ女ヲ三百人召集テ、朱砂ヲ煎ジテ、曼藥ト云藥ヲ合テ、此ヲノマス。月滿ジテ産子、色赤シテ偏ヘニ鬼ノ如シ。彼童ヲ人ニ不知シテ、深山ニ籠テ、此ヲソダツ。ヤウク生長スル程ニ、歌ヲ作テ習ハシム。『龜ノ甲ノ上ニハ勝ト云文字アリ。竹ノ林ノ中ニハ銅ノ人馬アリ。王莽天下ヲ可持驗ナリ』ト。カクシテ十四五計ノ時、髮ヲ肩ノマハリニ切廻シテ都ヘ出スニ、此等拍子打テ、三百人同音ニ此歌ヲ謳フ。此氣色不普通之間、人怪テ帝ニ奏聞ス。即彼童ヲ南庭ニ被召。先ノ如ニ拍子ヲ打テ、此歌ヲ謳ヒ、庭上ニ參リ臨ミケレバ、頗ル叡慮莫不怪。即公卿僉議有テ、歌ノ實否ヲ糺サムガ爲ニ、浦々ノ海人ニ仰テ龜ヲ召。其中ニ甲ノ上ニ『勝』ノ字書ケル龜アマタアリ。又近隣ノ竹ノ林ヲ求ルニ、其中ニ銅ノ人馬多ク取出セリ。帝此事ヲ驚思食テ、ギ御位ヲ避リ、王莽ニ被授ニケリ。天下ヲ持テ十八年トゾ承ハル。サレバ入道モ此事ヲ表シテ、三百人被召仕ニコソ。位ヲモ心ニ懸テヤオハスラン。難知トゾ申ケル。

この「或儒者」の話をまとめてみれば、

- (1) 漢帝の時、臣下王莽は帝位を企んで、数多い龜の甲の上に「勝」字を書き入れ海辺に放したり、銅の馬と人とを造って林の中に隠して置いたりする。
- (2) 「懷妊七月ノ女」三百人に「曼藥」飲ませ、「色赤」の子供、三百名を産ませる。
- (3) この子供達十四五頃になった時、「髮ヲ肩ノマハリニ切廻」した姿にさせ、京中で(1)の内容を歌わせる。
- (4) 歌の眞偽を糺した帝から讓位された王莽は、十八年間帝位につく。

ということになる。つまり帝位を篡奪した王莽の叛逆者としての人物造型が行われているのである。ここで注意したいのは、(2)(3)の話が覺一本、延慶本の兩本に共通する「禿髮・

童部」と称される童の由來とされていることで、「禿髮」が横暴のみならず、反逆の象徴として描き出されている点である。つまり、諸本に共存する前の部分における禿髮が清盛の専横・壓政の模様を象徴させるのに對し、この後話に記された禿髮は王莽の帝位篡奪の手段としての意味が持たせられる。そして延慶本は、關連記事の最後に下線の「サレバ入道モ此事ヲ表シテ、……難知」という「或儒者」の推測の詞を置くことによって、一つの物語的意味、即ち、清盛の「禿髮・童部」をもって帝位篡奪をたくらむ反逆者像造型の象徴となる可能性へ収束されてしまうのである。このような延慶本の記事を覺一本と比較した上で、柳瀬²⁾氏は次のように論じている。

すなわち、著者は当時に授業形態としてあった「談義」という講義のかたちを延慶本「清盛繁昌之事」後半部の構成に借用し、その機能としての論講に主人公清盛の意図を明らかにする語りを構想したのであろう。これは「儒者」の「談義」を借用して物語りを構成する筋立ての面白味のみならず、「談義」に慣れた当時の人々に著者が描く清盛像を權威ある説と信じさせる効果をも期待出来る。それは「禿髮」に對する不審を「儒者」が解き、そのことのために王莽が漢祚を奪った故事を例話に引いて解釋を展開する、という經典の精神を論じる主疏の方法を踏襲したのである。(中略) ここには王莽の「三百人」の數への清盛の拘わりをことさらに指摘し、清盛の心の内を不審と説き、推定の可否を判断せずに止めている。しかし、「難知」と重ねたことばはそれが真相であったことを示唆して、讀者に判断を委ね印象する巧みな話術と見える。

物語は「或儒者」に禿童に關する故事を語らせた後、「難知」として推測の用語で結ばせているわけであるが、柳瀬氏の解説にもあったように、当然、享受側には清盛像に反逆者の王莽のありさまが重ね合わせられていくのであろう。冒頭の「祇園精舎」に示されている「盛者必衰」「おごれる人も久しからず」の典型として認識されたのが覺一本の清盛と言えるなら、延慶本は清盛の二十年間の政權を、王莽が「天下ヲ持テ十八年」という短い榮華に止まったことと同じく見なしていたのであろう。また、覺一本の「祇園精舎」ではなく、延慶本のみ記されている「縦ヒ、人事ハ詐ト云トモ、天道詐リガタキ者哉」の挿入部は、王莽が禿童を使って帝位をだまし取ったことを指しており、それはほかならぬ清盛の行爲でもあった。

このように清盛を王位篡奪者として認識させようとする延慶本の傾向は、盛衰記、長門本でも確認されるが、まず、盛衰記を見れば、延慶本のように「或人」の疑問に對する、答えという形で、

2) 注1、前掲論文 p.162

昔も是風情の例有るらんとぞ私語ける。或人の申しけるは、本朝に例なし。漢家に八葉大臣と云ひける人、天下無双の賢臣にて、忠を賞し、罪を憐む事、堯舜の政化にも異らず、之に依って今の如く禿童を多くそろへて、金歸鳥と云ふ鳥を持たせて、國々港々に放ち立て云く、國廣く民多うして、万人の愁歎天聽に及び難き歟、聞出すに隨ひて奏せよ、直に召行はんと有りければ、愁を殘す者もなく、恨みを含む者もなし。國豊に民悦びて、政徳海内に及ぼしけり。されば是をば善者の童と名付くといへり。今の禿童は、事に触れて歎き、物の煩ありければ、惡者の童と云ひつべし。(中略)されば。入道も此事を表して、三百人を被召仕ひ、位を心に懸けて、かくや有らんとぞ語りける。何様にも名聞の至り歟、天狗の所爲にやとぞ私語さける。昔唐の弘農の揚玄琰が女に揚貴妃と云ふ美人ありき。玄宗皇帝に召されて、寵愛類なかりけるあまり、叔父混弟皆清貫につらなり。姉妹國夫人に封じて、富王室にひとしく、車服大長公主に同じかりければ、禁門を出入する時に、名姓を問はず。京師の長吏是が爲に目をそばめたりと云ふ事あり。彼れ久しからずして亡びにき。是直事のあらずとぞ覺えたる。

(源平盛衰記・卷第一「清盛怪鳥を捕る竝一族官位昇進の事附禿童竝王莽の事」)

とあって、まず、他の諸本に存しない「八葉大臣」の「禿童」の逸話が置かれてから例の王莽の話が続いている。「天下無双の賢臣」である漢家「八葉大臣」の「禿童」が「民」の愁い・嘆きを伝え聞く爲の「善者の童」であることに對して、「今ノ禿童」(清盛の「禿童」)は「惡者ノ童」であるという批難の評語を載せる。延慶本が「難知」といった推測の用語を用いて、享受側に批評を託すような形式をとっているのは違って、直接に清盛の專横・壓政について批難する評語を加えることによって、清盛に對する批難の程度を高めているのである。そうすることによって、盛衰記は清盛を王莽に匹敵する反逆者としてはっきりと位置づけているのである。またその上、盛衰記は、禿童が禁門を出入する際も、姓名を聞かれることなく、「京師の長吏」も見ても見ぬふりをしたと伝える。禿髮の權勢を象徴的に表した部分を、『長恨歌伝』における楊氏一家のそれに等しいものと明確に示して清盛の壓政・專横を暴いている。すなわち、盛衰記は三百人の禿童の由來についての話だけではなく、「八葉大臣」の「禿童」、楊氏一家の話などを加えることによって、陰濕な王位篡奪者の王莽を連想させる清盛造型が行われた延慶本と比べて、清盛に向けた批難の意図を更に深化・補強したのである。

續いて、この記事は長門本においては、どのような内容になっているか確認すれば、次のようである。

入道惡行張行の余りに、此禿童を召仕様を案ずるに、昔漢朝に王莽と云大臣有けるが、國の位を奪んと思ふ心ありければ、謀回らして、海中の龜を取集めて、甲の上に勝といふ字を書いて、若干の龜を海中に入る、また銅にて鎧甲を着たる人形の馬に乗たるが長三寸な

るを多く鑄集て、竹のいまだ筍なる時よごとによりて、是を入置てけり、また懐胎の女十人に朱砂を煎じ飲せけり、是を万仙薬と云、彼等が産る子を取集て、潜に深山に隠し置てけり、十二三に成ければ、彼等取出して見るに、赤くして偏に鬼のごとし、髪を首の廻りにそぎて、禿童になして赤き扇を持せて、王城へ出して、歌を教へてうたはせけり、龜の甲の上には勝と云文字あり、竹のよの中には銅の人馬あり、此事天のなす変也、是を伝聞てかくせられけりと言儀もあり、又家々にさゝやきけるは、昔かゝる例有やと尋ねに、本朝に例なし、漢家に八葉の大臣と申しける天下第一の賢臣おはしけり、忠なる者を賞し、罪有者を懲むこと、如來の大慈悲にことならず、諸國の人民、百姓の愁歎天達せぬ事多く有らん、汝聞出して奏せと、直ちに召質とちかひて、今のごとく禿童の八葉の金貴鳥と云鳥を持せて、國々の迂々に彼等を放し置れたり、かかりければ愁を残す者なく、恨を含人もなし、國豊にして世治れり、かゝりければ不動尊慈悲を授られたる金伽羅童子の如しとて、是をば善者童子と名付たり、入道の禿をば、惡者童子とも云つべし、漢家、本朝隔善惡共にこと他といへども、權威の程はかわらずとぞ申ける、凡只ごとに非ず、

(長門本・卷第一「禿童附王莽事」)

内容の面から見たところ、長門本はどちらかというと、延慶本よりは盛衰記に近いと言えよう。といっても兩本間にも異同が見られ、長門本は盛衰記に載せられている楊氏一家の權勢と關連する記事を欠いている。勿論この楊氏一家の記事は前半部の禿髮の權勢を示す象徴性をもつ話であるが、そのほかの「八葉の大臣」、「王莽」についての記事を載せることで、清盛のイメージを陰濕な王位篡奪者である王莽に匹敵する人物として認識させようとする長門本の意図は、盛衰記の傾向とあまり変らない。

ここまで見てくると、語り系であれ讀み本系であれ、物語が如何に清盛を造型しようとしたかなどを考察するにあたって、この禿髮と關連する記事が重要な意味をもっていることは明らかである。こうした禿髮のもつ物語の意味について佐々木八郎³⁾氏は、次のように説明している。

六波羅の「かぶろ」は今でいえばスパイである。專制的支配者が必ず行なうスパイ政治の現われともいえよう。だが、清盛が放ったスパイは陰慘な感じがない。髪をかぶろに切りまわし、紅き直垂を着ていたといえ、歌舞伎の舞台で見る吉原の禿を連想させるものがある。特に人目につきやすく装った六波羅の「かぶろ」三百人が「京中にみちみちて往反し」た状態はまさに異様の壯觀であつたであろう。忍び姿のスパイを放たずに、ことさら目だつ姿の「かぶろ」を放つたところに、豪放磊落な、派手好みの清盛の性格がうかがえるというものである。

3) 佐々木八郎『平家物語評講上』(明治書院、1963・2) p.30

また、こうした佐々木氏の見解を受け継いだように、同趣旨の見解を示しているのが富倉徳次郎⁴⁾氏である。

清盛の獨裁政治、スパイ政治を述べた章段である。(中略) 禿童という制度は、仁安三年の出家後、清盛最盛期の頃のことであろうが、はで好みの清盛らしいやり方で事實談と考えたい。なお読みもの系には、特に赤衣の禿童を三百人揃えたことについて、王莽の故事を挙げ、清盛も三百人の禿童を用いたのかと伝えているが、故事引用の好みで加えられたもので、もとより信すべきではない。

こうした富倉氏の見解に對して、長野嘗⁵⁾氏はこの清盛の禿髮の意味について、

政策上からみれば、これはスパイ政治ではない。恐怖政治である。平家の悪口を言ったり、清盛の政治を批判したりする者の口を、事前に封ずる方策である。富倉氏はいかにもはで好みの清盛らしいやり方だというのが、それだけではないと思う。いかにはで好みの清盛であっても、あの頭のよい實際家の彼が、こんな兒戯に類する手段でスパイ政策の効果が上がると、本気で考えるはずがない。(中略) ただ、それに少年を使ったのは、いかにも清盛らしいやり口だ。こんなことに大の大人を使う要がない、お前たち、ひとつやって來い、と放った清盛の豪放磊落な氣性がうかがわれる。

と説明する。以上、三人の先學の指摘もあったように、清盛の「禿髮」は清盛の專制的支配者としての權勢を象徴するものであり、恐怖政治を示唆する意味をもつものとして理解される。長野氏は禿髮のことをスパイとして認識することに問題点を提起しているが、廣義でスパイとしての認識も可能かと思われ、禿髮におおやけにスパイ的な行動をさせる点には、豪放磊落で派手好みの清盛の性格もうかがえるのである。しかし、これは覺一本などの語り系に對してのみ言える清盛への評価ではなかろうか。読み本系の場合は清盛の禿童をもって王莽の王位篡奪時の詐謀を連想させるものとして位置付けて、結局、豪放磊落なはずの清盛像を王位を企む陰濕な壓政者、暴政者として感じさせているのである。また、富倉氏の見解について考えざるを得ないのは、読み本系において清盛が使った赤衣の三百人の禿童が王莽の故事を連想させるのは、物語の故事引用の好みで發するものだという点である。清盛の禿童のことと關連づけて、王莽の王位篡奪に關する故事の引用が行われたのは、單純に物語の故事引用の好みによっただけのことではなく、帝位を企むような人物としての清盛を造型しようとする読み本系の意図に發するものではあるまいか。

4) 富倉徳次郎『平家物語全注釋上卷』(角川書店、1966・11) p73

5) 長野嘗一『平家物語の鑑賞と批評』(明治書院、1976・9) p.15

4. おわりに

ここまで『平家物語』の巻第一「禿髪・禿童」における清盛を、覺一本と延慶本とを中心として語り系、読み本系における反逆者像の造型と関連して考察してきたが、両系統共に清盛を反逆者として造型しようとする意志は確かに認められる。ただ、その反逆は何に對する反逆であり、如何なる性格の反逆であるか、という点について考えなければならない。清盛造型の形態には多かれ少なかれ違いが見られるのであって、まず、語り系は清盛を、「祇園精舎」に示されている「おごれる」「たけき」人物、即ち、王朝の今までの秩序に反する暴政・壓政者として描こうとする意識が強かったのではないかと思われる。

こうした語り系の傾向とは違って、読み本系にはことさらに清盛の反逆者像が具体化され王位を企む陰濕な人物として位置づけられる傾向が認められる。

冒頭の「祇園精舎」に示されている「盛者必衰」「おごれる人も久しからず」の典型として認識させようとするのが語り系の描いた清盛像と言えるならば、読み本系は清盛の二十余年間の政權を、王莽が「天下ヲ持テ十八年」という短い榮華に止まったことと同じように見なしていたのである。そのため、延慶本に記されている「縦ヒ、人事ハ詐ト云トモ、天道詐リガタキ者也」（第一本「平家先祖之事」といった文句は、王莽が禿童を使って帝位をだまし取ったようなことを指しており、それはほかならぬ清盛の反逆でもあった。

「祇園精舎」「禿髪」などの章段における両系統間の異なり、それは清盛像造型へ向けられた諸本間の違う方向性によるものであって、それによって、反逆者としての清盛が語り系より読み本系においてよりつよく強調されるようになったり、位相を異にする清盛像が生まれてきたりする結果がもたらされたのである。

現存『平家物語』が複数の手によって創られた伝本であるという点を挙げて、佐伯眞一氏⁶⁾は、『平家物語』の挿話説話に物語的意味を付与する際において、次のような注意を促している。

諸説話が自らの意志によって集合し、自然に平家物語を作りあげたのではない限り、説話の収録にはそれなりの作者的意図が存在したはずだと考えるのは、おそらく正しい。しかし問題は、作者的意図というものが決して一様ではなく、しばしば言われるように、近代小説の作者が常に全体の構成の中における意味や効果を念頭において部分を叙述するのと同じような發想では律しきれないということである。

現存の諸本には複数の作者の手が加わったと見なされることは確實であって、清盛と關

6) 佐伯眞一「平家物語構想論の可能性」(『同志社國文學』第十七号 昭和56・3) p.69

わる収録説話の各々が、作品全体における清盛像造型のために一律的な方向性をもってはたらいっていると断言することはできない。ただし、各々の説話の収録者（単数であるか複数であるかはともかく）は、少なくとも意識の中では聞き手（あるいは読み手）が何らかの方向で享受してくれることを願って、新たに説話を収録したり、または既存の内容を縮小、削除したりしたと十分考えられる。そのような享受の方向を誘導する目的で行われた内容の変造がよく示されたのが、この「禿髮・禿童」をめぐる諸本の記事の異同ではなからうか。そして、享受の方向を効果的に誘導するためには、その内容を作品の早いところに設けることも考えられるのではなからうか。このような考えの上で、「禿髮・禿童」はいち早く巻一に載せられることによって、語り系、読み本系おのおのにおける反逆者としての清盛像の違うイメージは物語全体に響きわたっていくことになるのである。

【参考文献】

- ・渥美かをる(1962)『平家物語の基礎的な研究』三省堂、p.333
- ・渥美かをる(1979)『軍記物語と説話』笠間書院、p.159
- ・後藤丹治(1944)『改訂増補 戦記物語の研究』磯部甲陽堂、p.159
- ・小林美和(1977)「延慶本平家物語の説話構成—故事説話の位置について—」『立命館文学』第384・385号、p.188
- ・小松茂人(1962)『中世軍記物の研究』櫻楓社、p.152～p.168
- ・佐伯眞一(1980)「延慶本平家物語の清盛追悼話群」『軍記と語り物』第16号、p.44
- ・佐々木八郎(1963)『平家物語評講上』明治書院、p.30
- ・佐々木八郎(1981)『中世文学の構想』明治書院、p.86～p.157
- ・坂口文章(1943)『平家物語の説話的考察』昭森社、p.134
- ・杉本圭三郎(1985)『軍記物語の世界』名著刊行會、p.119
- ・谷村茂(1987)「『平家物語』における清盛の座」『同志社国文学』第29号、p.31
- ・富倉徳次郎(1966)『平家物語全注釋上卷』角川書店、p.73
- ・長野嘗一(1975)『平家物語の鑑賞と批評』、p.15
- ・永積安明(1969)「平清盛—平家物語における—」日本文学研究資料叢書『平家物語』有精堂、p.154
- ・堀竹忠晃(1985)『平家物語論序説』櫻楓社、p.211
- ・水原一(1979)『延慶本平家物語論考』加藤中道館、p.283～p.295
- ・山下宏明(1983)『軍記物語の方法』有精堂、p.46～p.69
- ・山下宏明(1984)『平家物語の生成』明治書院、p.7～p.57・p.134～p.143
- ・渡辺貞磨氏(1988)「再論・『平家』慈心坊説話の背景」大谷大学『文芸論叢』第30号、p.34

要旨

『平家物語』は平家一門の興亡盛衰の過程を描いた作品であって、その一門の棟梁といえる清盛への造型がいかなる指向性で展開されているかは物語を把握していくに重要な手がかりになることは言うまでもない。こうする中、清盛造型の指向性を窺わせてくれる記事が「かぶろ」である。この章段は殆んど諸本に載せられているが、本によっては内容の違いが激しいことから各諸本の清盛造型への指向性を考察するに、好個の例と言える。

この記事と関連して、複数の諸本を調べた結果、語り系と読み本系の間、その内容の違いが著しく現れてくるのが確認された。

覺一本をはじめとする語り系と延慶本などの読み本系における「かぶろ」関連記事には、若干の差はあっても、ほぼ同じ趣旨の内容をもつ共通部分があるかとしたら、読み本系の多くの諸本には、語り系には記述されていない部分が載せられている。まず、共通する部分には、髪型をかぶろにした二、三百の少年達を通して清盛が専制的政治を行ったことを窺わせる記事が置かれている。そして語り系の諸本はそこまでの内容を伝えているが、読み本系には、その続きの記事が見え、それには清盛の専制的政治を越える王位を篡奪しようとするような清盛造型が行われていることが確認される。つまり、清盛をもって、語り系には暴政を振る舞う人物として造型するに止まっているが、読み本系は王莽のような王位篡奪者に等しい人物として読み手に認識させようとする意志が確実に示されている。こうした清盛造型と関連した両系統の違いは、各系統の諸本がおのおの異なる性格の本であることを裏付ける意味を改めて確認させてくれる意味をもつと考えたい。

キーワード：覺一本『平家物語』、延慶本『平家物語』、平清盛、編著意識、禿髪、反逆者

투 고 : 2004. 11. 30
1차 심사 : 2004. 12. 11
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (134-774)서울특별시 강동구 둔촌1동 주공아파트 435동 705호
電 話 : (02)486-5653 / 011-9839-5652
e-mail : keehoonoh@hanmail.net